

3. 野鳥の減少の原因調査

野鳥の減少の原因として考えられる、生息環境の変化を中心に7つの要因について調べました。

要因1 周辺環境の変化

大きな目立つ建物が増えたので調べました。野鳥が多く生息する地域では、最近10年で宅地開発は大きく進んでおらず、影響は小さいと考えられます。

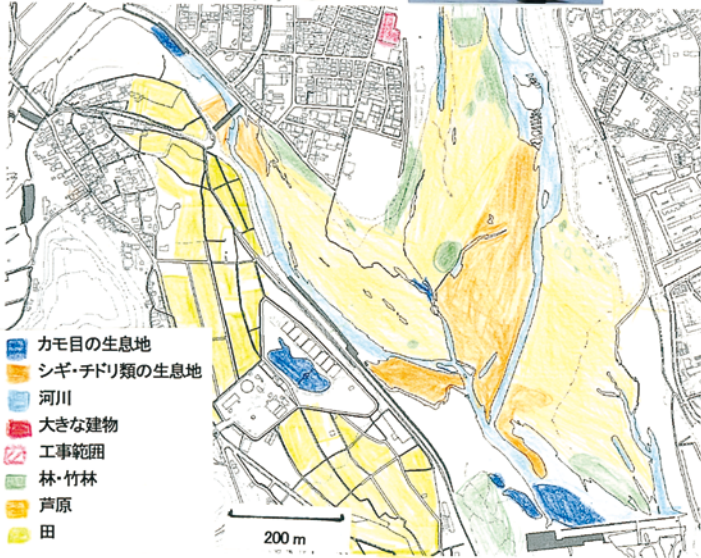
要因2 河川環境の変化

台風の影響で、河川敷は水につかり、芦原はほぼ全て流され、川の流れも変化しました。さらに護岸の復旧工事に伴い、広い範囲での樹木の伐採、流木の撤去、河川敷での整地が行われ¹³大きな影響がありました。野鳥のエサ場への影響については要因4、5の項で考察しますが、現在では芦原の大部分が戻り、環境が回復しつつあります。一方で、これまでは、深い芦原と川の流れに阻まれ立ち入ることが難しかったのに、簡単に人が入れるようになった場所もあります。このため警戒心が強いササゴイなどの野鳥が減少した一因になったと考えられます。



台風前

カイツブリ



要因3 飛来時期に餌が少ない 田んぼに水がない(シギ・チドリ類)

減少が著しいシギ・チドリ類の野鳥について調査しました。あきる野市に飛来する半分近くの種が、春、オーストラリアや東南アジアなどから繁殖のためにシベリアへ行く途中、日本で羽を休め、食事をします¹⁰。秋は逆に北方から南方に越冬に行く途中に休憩します。一般的に、シギ・チドリ類は干涸しているイメージがありますが、一部の内陸部に飛来するシギ、チドリも昆虫や節足動物をエサとするので、河口付近の砂地と似たエサ場がある田んぼや河川に飛来しますが、これらの食料が河川よりもより豊富な、田んぼの方を好みます。秋川下流域には都内最大と言われる田んぼが残っています。しかしながら、飛来時期である春の4月末から5月上旬ごろ、秋の8月末から9月下旬には、田んぼに水を張っていないため、エサが採れません。水を張る時期は、ここ10年で大幅には変わっていないので、減少の原因ではないと考えられます。

要因4 シギ・チドリ類の好むエサ場が減少

要因3で示したように、シギ・チドリ類が好むエサ場である田んぼが、飛来時期に水が張っていないため、秋川下流域では川の浅瀬でエサを採取しているのを見ます。秋川下流域では、チドリ目の野鳥が好むエサが多く生息する沼地や砂地が多数ありましたが、実際に見て調査した結果、台風後には減少したことが確認できました(図5)。エサ場が減ったことは、チドリ目の野鳥の減少の一因であると考えられます。

台風後

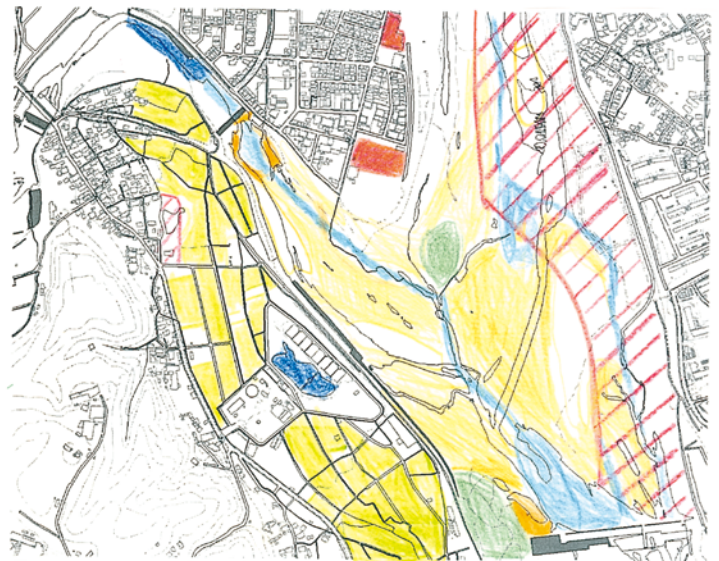


図5 秋川下流域の台風前後のエサ場の変化

要因5 カモ目の好むエサ場が減少

減少したカモ目の種類を表3の159~165番で確認すると、この地域では「迷鳥」と呼ばれているものであり、基本的には他のカモ類が多数いるときに秋川下流域へ紛れてやってくる野鳥でした。このため、カモ目の飛来自体が減っていると推測できます。観察記録を参照すると、実際に減少が確認されています⁹。カモ目の多くの種は、秋になると、主に北海道以北から越冬のために日本各地にやってきます。秋川下流域に飛来するカモ目は主に、水草、落ちた木の実などを食べるので、エサが豊富かつ隠れる場所がある、流れが緩やかな水深がある場所を好みます。図5にまとめたように、秋川下流域にはそのような場所が点在していましたが、台風後に昭利用水堰の北側の水深がある場所が縮小してしまったことが分かったので、カモ目の野鳥の減少の一因であると考えられます。

要因6 捕食する猛禽類の増加(カモ目)

カモ目(ハクチョウ、マガン等は除く)の天敵であるオオタカは、僕が住む住宅街の中でも狩りや食痕が見られ、秋川下流域での観察数が増加しています。また、皇居の森でも繁殖が確認されるなど、東京都でも数を増やしています¹⁰。環境省の調査により、国内では絶滅する可能性が低くなり、国内希少野生動物種から解除され¹⁰、オオタカが増えていることは間違いありません。図5に示したように台風による被害で、合流地付近にあった林が少なくなったことで、見通しが良くなり、オオタカが狩りをしやすくなり、さらにカモ目が減少した可能性があります。

要因7 天敵から逃げられる野鳥の増加

カモ類は全国的に数が減り、中でも著しく減少しているのが、オナガガモなどの水中に潜ることが出来ないカモ類だと森の子レンジャーの活動中に教わりました⁹。逆にオオバン、カイツブリなどのオオタカから狙われたときに、水中に潜って、身を守ることが出来る野鳥は減少するどころか増加しています^{11,12}。こうした事例は日本各地で確認されています。

2020年から2021年にかけての秋川下流域周辺でのカモの記録数を見ると、カルガモ、マガモ、コガモの3種類が全体のおよそ9割を占めていて⁹、その他のカモは非常に少なくなっています。そのため、この要因はあまりカモ類の減少には、かかわっていないと考えられます。



狩りをした
オオタカ



オナガガモ

4. まとめ

生息環境や天敵にかかわる7つの要因についてまとめた結果、台風の影響で川の流れが変わったことで、エサ場が減少し、さらに人の進入や猛禽類の増加が起こり、野鳥がより警戒しやすい環境になって、野鳥の種類が減少したのではないかと推測できました。

秋川下流域では、夏鳥、冬鳥、旅鳥などの渡り鳥が大きく減少した一方で、一年中生息している留鳥の減少は小さく、地元の環境の変化にも対応出来る種が多いためだと思われます。しかし、長距離を移動する渡り鳥は留鳥より、環境の変化に敏感で警戒心が強いので、少しでも、住みにくいと感じると別の場所へ飛んで行ってしまい、秋川下流域では減少しているのではないのでしょうか。近隣にあるカモやチドリが比較的多く飛来する水辺環境として、秋川と同じく多摩川と合流する平井川、浅川、谷地川の下流域、羽村取水堰、狭山湖、多摩湖などがあげられます。秋川下流域だけではなく、これらの環境に生息する野鳥も調査してみたいです。

野生動物の生息数や野鳥の飛来数は、その場所の環境変化の目安となります。台風から4年が経ち、芦原は台風以前と変わらないくらいに復活しました。多くの野鳥たちが再び、秋川下流域に戻ってくることを期待して、これからも観察を続けていきたいです。

5. 参考文献

- 1) 西原健治 2011『東京秋川鳥紀行』文芸の森社
- 2) zoopicker <https://zoopicker.com/entrance>
- 3) 森林レンジャーあきる野隊員情報
- 4) BIFDER 編集部 2021-2023「BIFDER」文一総合出版
- 5) 森林レンジャーあきる野新聞 <https://www.city.akirunoto.tokyo.jp/0000001642.html>
- 6) 狭山湖の自然 2019年10月7日 多摩川昭利用水堰野鳥会 <https://rnatn1973.ecblog.jp/239636681/>
- 7) 数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ 八王子・日野カワセミ会 <https://foundation.tokyo-u.ac.jp/environment/vp-content/uploads/2018/04/G231.pdf>
- 8) 東京都西多摩地区(昭島市)日の出町-あきる野市の野鳥調査 <http://riishilife.coocan.jp/bird00.html>
- 9) あきる野市自然環境調査部 2012/3「知って守ろうあきる野の自然」あきる野市環境経済部環境課
- 10) 日本タカの渡りネットワーク 2020 <http://www.gsj.or.jp/nork/nwkwet/hawkeet.html>
- 11) BIFDER 編集部 2021/1「BIFDER」P58-59 文一総合出版
- 12) 東京レントデータブック カムリ/カイツブリ <https://tokyo-mdb.metro.tokyo.lg.jp/>
- 13) 京浜川川事務所 <https://www.ktr.mlit.go.jp/ks/in/ks/in/01266.html>
- 14) 日本野鳥の会東京研究部 <http://www.yachou-tokyo.org/birdstudy/tokyoyounin/mokuroku2000/pdf/mokuroku/hansyoku50.pdf>
- 15) オオタカの国内希少野生動物種解除と解除後の対応について <https://www.env.go.jp/nature/wishu/domestic/otaka.html>
- 16) 先陣の2019「日本の渡り鳥観察ガイド」BIFDER special」文一総合出版
- 17) 小宮輝之 2019「日本の渡り鳥観察ガイド」BIFDER special」文一総合出版



カニを捕る
キアシシギ

6. 謝辞

森林レンジャーあきる野の皆様ありがとうございました。

羽がたく
ミコアイサ

